陰肉奉納祭　当日編

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

【作品タイトル】
陰肉奉納祭　当日編

【Ｎコード】
Ｎ２５５９ＨＷ

【作者名】
ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
【陰肉奉納祭】
それは代表に選ばれた人間の生殖器を神に捧げ、一年の豊作を祈る儀式の事。
男の子なら陰茎を切断、女の子なら大陰唇からクリトリスにかけての外性器を削ぎ落として奉納する事となる。

そんな儀式の代表に選ばれた女の子のお話、儀式当日編になります。

前作となる前日譚はこちら

ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８８９５ｈｐ／

２０２２／１０／２２追記

続編となる後日談を投稿しました：ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０３８９ｈｘ／

※この作品はｐｉｘｉｖにも同じものを投稿しています

（前書き）

【陰肉奉納祭】
それは代表に選ばれた人間の生殖器を神に捧げ、一年の豊作を祈る儀式の事。
男の子なら陰茎を切断、女の子なら大陰唇からクリトリスにかけての外性器を削ぎ落として奉納する事となる。

そんな儀式の代表に選ばれた女の子のお話、儀式当日編になります。

前作となる前日譚はこちら
ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８８９５ｈｐ／

２０２２／１０／２２追記
続編となる後日談を投稿しました：ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０３８９ｈｘ／

※この作品はｐｉｘｉｖにも同じものを投稿しています

「それでは只今より、陰肉奉納祭を執り行います。今年陰肉を捧げてくれるカゲニエは沙恵香様です」

今日は陰肉奉納祭の当日。

沢山の人が集まった神社、そこに用意された祭壇の前で神主さんが儀式の開始を宣言する。

陰肉奉納祭とはその名の通り陰部の肉、つまりは生殖器を神様に奉納して一年の豊作や幸福を祈るお祭りの事。

カゲニエはその時二十歳前後の人間から男女交互に選定され、男の子の場合は陰茎を切断、女の子の場合は陰唇から膣口にかけてといった外性器全体をまとめて削ぎ落として奉納するのだ。

「沙恵香です。今年のカゲニエに選ばれた事、とても光栄に思います」

神主さんに続いて祭壇の前に立ち、見物人に挨拶をするアタシ。

女の子としての大切な部分を切り取られる事はもちろん怖いけれど、カゲニエを光栄に思うのも間違いなくアタシの本心なのでこの言葉に嘘はない。

「こちらが本日捧げさせていただくアタシの陰肉となります」

儀式用の寝台に横たわったアタシは下半身の服を全部脱ぎ、おまんこを見せつけるように両足を大きく広げていく。
また、その際寝台に備え付けられていた鏡の角度を調整し、自分のおまんこを自分自身でも確認できるようにしておいた。

こんなに沢山の人の前、それも昼間の屋外で性器を露出するのはとんでもなく恥ずかしい事だと頭では理解していても、これから起こる事を思うとおまんこを見られる程度はどうってこと無いように思えてしまう。

(股間に直射日光を浴びるなんてカゲニエか露出狂じゃないと経験できないよね……最初で最後のおまんこ日光浴だ)

妙に冷静なままの頭でそんな下らない事を考えている間にもおまんこを切り取る準備は進められていて、気付いた時には様々な器具を乗せた作業台がアタシの足の間に準備されていた。

「沙恵香様、これより陰肉の切除を行わせて頂きます。まずは切除部分のマーキングをします」

医療用のゴム手袋を着けた男性がアタシに声をかける。
この人がこれからアタシのおまんこを切り取る人、アタシの女の子としての大切な部分を終わらせる人なのだ。

男性は作業台からマーカーを手に取って、大陰唇と内腿の境界に沿って一本の線を引いていく。
アタシのおまんこの未来を予告するようなその切り取り線に、覚悟を決めていたはずの心が少しだけ寒くなった気がした。

「次に麻酔を打っていきます、少し痛いかもしれませんが我慢して

ください」

男性はマーカーを注射器に持ち替えると、アタシの股間に麻酔薬を注射し始める。

事前にされていた説明によるとこの薬は麻酔だけではなく血管収縮効果もあり、これを使う事によって切り取る時の出血を大きく減らせるらしい。

「くっ……！うぅ……」

「何箇所かに打っていくのでもうちょっと我慢をお願いします」

「は、はい……んっ！」

チクリとした痛みで声を漏らしてしまうアタシに構わず、男性は針を刺す場所を変えながら麻酔薬を打ち込んでいく。

流し込まれる薬によって股間の中に冷たさが広がっていくたび、アタシの心の中にも同じ様に冷たさが広がっていくようだった。

割れ目を囲う様に何回か注射を打ち込んだ後、男性は麻酔薬の効きを確かめるためにアタシのおまんこを弄り回し始める。

「どうですか？今大陰唇を触っているのですが感覚はありますか？」

「いえ、何も感じないです」

「ではクリトリスを強くつまんでみます、痛いですか？」

「何も……感じません……」

「膣に浅く指を挿れているのですがどうでしょうか？」

「わかりません…………おまんこの感覚が全部無くなっちゃってます……」

切除に向けた準備が着々と進められてる中で、ついに感覚が全て失われてしまったアタシのおまんこ。
アタシの股間に付いているはずのおまんこがもうアタシの物では無くなったように思えて、心の中の冷たさが一気に恐怖へと変わっていった。

「麻酔もしっかりと効いたようですし、このまま陰肉を切除いたします。手元が狂うと危険ですので絶対に動かないでください」

アタシのおまんことお別れをする時間がどんどん近づいてきてしまう。
男性は手にした白鞘の小刀を抜き放ち、冷たい輝きを放つ切っ先をアタシの股間にピタリとあてがった。

（あぁ、ついに切られちゃう……アタシのおまんこ無くなっちゃう……）

とても鋭く研がれた小刀が抵抗をほとんど感じさせないような動きでアタシの股間に潜り込んでくる。
麻酔薬のお陰で痛みどころか切られる感覚すら存在しない現実離れした光景に、「これは何かのドッキリやトリックで、実はおまんこは切られてないのでは」なんて都合の良い現実逃避ができたのも一瞬だけ。
じわじわと流れてくる血や傷口から見える皮下脂肪と肉のリアルな

色味によって、目の前で行われている行為がドッキリやトリックとかじゃなくて現実なんだと理解できてしまった。

全身がガクガクと震えだしそうな恐怖を必死を堪えながら、切り取り線に沿って進み続ける小刀をじっと見つめるアタシ。

（本当に切られてる……もし今めちゃくちゃに抵抗したり逃げ出したりしたら、おまんこ失わなくて済むのかな……？）

大切な儀式を途中で投げ出す事は許されないと頭で理解しているはずなのに、そんな良くない考えが湧いてきてしまう。今すぐにでも儀式から逃げ出したくなる衝動をカゲニエとしての使命感で必死に抑えこみ、アタシは小刀による股間への蹂躙行為をただじっと受け入れ続けていった。

「陰肉の周囲が切り終わりました。後は中央部にある膣、尿道、クリトリスの神経といった部分を切り離せば陰肉の切除は完了となります」

男性からの最後通告。この工程が終わればアタシのおまんこは身体から完全に取り外されてしまう。

周囲の切り込みによって股間から少し浮いてしまった割れ目の下側をつまんで引っ張り上げた男性は、小刀を下から上に動かしてアタシのおまんこをゾリゾリと削ぎ落としていく。

膣部分を切断していく銀色の刃が膣口の中に見えてしまったのは、性器の構造上当たり前の事とはいえとてもショッキングだった。小刀が進むたびに身体から引き剥がされてベロンとめくり上がっていくおまんこに、取り返しの付かなさを感じて心臓が早鐘を打つ。

あっという間に膣口や尿道が断ち切られ、とうとうクリトリスから体内に向かって伸びる神経の束だけで身体と繋がっている状態になってしまったアタシのおまんこ。
そしてついに、今までずっと一緒に生きてきたおまんことお別れする瞬間がやってきた。

……プツンッ！

身体とおまんこを繋げていた最後の部分が音もなく切断される。
クリトリスの神経が断ち切られる瞬間、痛みも感覚も無いはずの股間からとてつもない衝撃が全身を駆け巡り、ビクンビクンと腰が跳ね上がってしまう。

「お集まりの皆様も御覧ください、こちらが沙恵香様より頂きました陰肉になります」

男性は腕を高々と掲げ、アタシから切り離したおまんこを見物人に見せつけていく。

（あぁ……完全に取れちゃった……アタシのおまんこ、あんな所でみんなに見られちゃってる……）

さっきまでアタシの股間に付いていたはずのおまんこが、身体から離れた場所で血を滴らせながらプラプラと揺れている。
女の子にとって大切なはずの生殖器がただの肉になってしまったその光景を見ていると、あまりの喪失感に頭がクラクラしてしまうのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

おまんこの切除が終わり、陰肉奉納祭は次の段階へ進んでいく。

アタシのおまんこだった肉はこれから神主さんの手によって血などを洗い清めてもらい、その間にアタシの方も股間の傷口を縫い閉じてもらうのだ。

「では沙恵香様、引き続き傷の処置を進めさせていただきます。まずは傷口の消毒からです」

さっきまで切除役だった男性が、今度は縫合役となってアタシの股間に大量の消毒液をかけていく。

透明な消毒液によって傷口に滲んでいた血液が洗い流された事で、変わり果ててしまったアタシの股間がハッキリと見えてしまった。

（うわぁ……やっぱりすごくグロい…………それに、アタシのおまんこ本当に無くなっちゃったんだ……）

クリトリスも、ビラビラも、割れ目すらも無くなり、黄色い皮下脂肪と真っ赤な肉だけが露出した状態になってしまったアタシの股間。傷口の中央にかろうじて見えるピンク色をした膣と尿道の粘膜だけが、アタシに唯一残された女性器の痕跡だった。

「次は傷口の縫合になります。見るのが辛いのでしたら目を閉じて

いても構いませんよ？」

股間のグロさと喪失感に呼吸が荒くなっていくアタシを見かねたのか、男性はそんな気遣いの言葉をかけてくれる。

でも、どんなに辛かったとしても奉納祭の全てを目に焼き付けたかったアタシはその言葉に首を横に振り、目をしっかり開いたまま縫合されていく股間を見続けていた。

手際良く動く針と糸によってアタシの股間は下から上へと、傷口のすぐ外側にある皮膚を左右からくっつけるようにして縫い閉じられていく。

膣や尿道の部分も穴をちゃんと残す形で綺麗に縫い進められ、股間にあったはずの傷跡はあっという間に一本の縫い目へと変わってしまった。

（この股間の穴……千春さんに見せてもらったやつとおんなじだ……）

女の子の割れ目が完全に失われ、膣と尿道の穴だけがポツンと開いている股間。そのふたつ並んだ小さな穴を見て、アタシはカゲニエの先輩である千春さんの事を思い出す。

千春さんは二年前のカゲニエに選ばれた女性で、アタシに陰肉奉納祭やカゲニエについての色々な事を教えてくれた人。

アタシが今この場から逃げ出さずになんとか踏み留まれているのは、おまんこを切除されてしまう不安を親身になって解消してくれた彼女のお陰で間違いなかった。

（大丈夫！千春さんも言ってたし、おまんこが無くても何とかなる！……はず……）

完全に空元気でしかなのは理解しているけれど、それでもなんとか自分を奮い立たせようとアタシは千春さんとの事を思い出すのだった。

「沙恵香様より切り取らせて頂いた陰肉の洗浄が終わりました。よろしければこちら、お確かめ下さい」

排尿用のカテーテル挿入やガーゼの貼付けといった股間に対する処置が全部終わったのとほぼ同時に、豪華な装飾が施されたお盆を持ってアタシの前に現れる神主さん。
千春さんの写真の中で見た憶えがあるその豪華なお盆にはもちろん、アタシから切り取られたおまんこの肉が割れ目を上に向けた状態で乗せられていた。

肉の中に残っていた血も全部抜かれたせいなのか少し青白く見えるおまんこへ、震える指をおずおずと伸ばしていくアタシ。
大陰唇を触った時のプニッとした柔らかさにその肉が本物のおまんこである事を、そして体温を全く感じないヒヤッとした冷たさにそれがもう生きてない事を理解させられてしまう。

力がうまく入らない腕でなんとかお盆の上の肉を持ち上げて、真正面からという初体験のアングルでおまんこをじっくり観察するアタシ。
今までの上から見下ろす視点とは少しだけ印象が違ったけれども、クリトリスやビラビラなどは確かにとても見覚えのある形をしていたのだった。

(うん、これは間違いなくアタシのおまんこだ……でも、もうアタシの物じゃないんだよね……)

自分のおまんこを自分の手で持っているという普通なら信じられない状況なのに、手の平で感じる重さや肉の質感がその状況を本当の事だと伝えてくる。
だけど、膣口に指を浅く沈めたりクリトリスをぎゅぅっと力いっぱい抓ったりしてみても、アタシの身体には気持ち良さも痛みもなにひとつ伝わってこなかった。

もうアタシの股間にはおまんこが付いてない、これから先の人生でクリトリスや割れ目からの性感を得ることは絶対にできない。
女の子として大切な部位や快楽を失ってしまった悲しみと喪失感に、アタシの目からポロポロと涙が零れ落ちていく。

(今までずっと一緒に居てくれてありがとう……うぅぅ、ここでお別れになっちゃってごめんね……)

両手で包み込むようにしたおまんこを胸の前まで抱き寄せて、アタシはすすり泣きながら心の中で感謝とお別れを告げる。

幼い頃にお母さんから「ここは女の子の大切な部分だから綺麗にしておかなきゃ駄目よ」と教わった事。
中学生の頃に憶えてからしばらく夢中になってしまったオナニーの気持ち良さ。
高校生の頃少しだけ付き合っていた彼氏にセックスで優しく愛撫してもらった事。
そしてカゲニエに選ばれてから今日までの間、毎日暇さえあればやっていた思い出作りのオナニーと記念撮影。

おまんことの思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡っていく。
でももうお風呂の時に割れ目を開いて内側までしっかりと洗う必要は無い。
クリトリスやビラビラを刺激してオナニーする事だってもうできない。
おまんこのあるアタシとセックスできたのは高校時代の元彼だけ。
アタシのおまんこはこの世から完全に失われ、電子データの中にしか存在しなくなってしまう。
そしてその思い出と対比するかのように、おまんこを失った事に対する喪失感もたっぷりと実感してしまったのだった。

「沙恵香様、そろそろ儀式の方を進めさせて頂きたく存じます」
「ひぐっ……わ、わかりました。陰肉を……お返しします」
大切な身体の一部とお別れしてしまうのが悲しくてひたすらに泣き続けていたアタシは、いい加減儀式を進めて欲しいとついに神主さんから急かされてしまった。
自分の物だったおまんこに対して「返す」なんて言葉を使った事にちょっとだけ切なさを感じながら、アタシは胸の前に置いていた手をお盆の上へ移動させていく。
（この手を離しちゃったらもう二度とおまんこを触れないんだ……離したくないけど、ちゃんとやらなきゃ……）

後は手を離すだけでおまんこの肉をお盆に返す事ができるという状態だけれども、これが正真正銘最後の機会になってしまうと思うと指がうまく動かなくなってしまう。
嫌がる心をカゲニエとしての使命感でどうにか塗りつぶし、アタシはゆっくりゆっくりと手を開いていった。

アタシがやっとの思いで手放したおまんこの肉は、お盆の上に乗ったまま神主さんの手で祭壇の前まで運ばれていく。
祭壇の中央ではごうごうと炎が焚かれていて、その炎で陰肉をお焚き上げをする事によって奉納が完了するのだ。

（あぁ……アタシのおまんこが神様に捧げられちゃう……全部燃えてこの世から消えちゃうんだ……）

神主さんは両手を合わせて神様に祈った後、お盆の上に乗った陰肉を持ち上げて炎の中に投げ入れる体勢を取った。

ヒュッ……！

とうとう炎の中に投げ入れられてしまったおまんこの肉。
人間の肉が炎の熱になんて耐えられるはずもなく、あっという間に皮膚が、脂肪が、肉が……焼けて、燃えて、焦げていく。
黒焦げになったおまんこは形を保つ事すらできなくなり、炎の勢いによって粉々の灰となり崩れ去ってしまう。

（おまんこ……全部灰になっちゃった…………こうやって実際に無くなっちゃう光景を見ちゃうの、やっぱり辛いな……）

おまんこの形が完全に失われて消えてしまった悲しみは、今まで感

じていたおまんこ喪失の悲しみとはまた少し違った感じがする。
一日の間に、切り取られた瞬間、切り取られた物との対面、そして燃え尽きて灰になる様子と何回もおまんこ喪失の悲しみを味わい、もう疲労困憊の状態となったアタシは寝台に倒れ込んでしまった。
「今年も陰肉は無事に捧げられ、陰肉奉納祭はつつがなく完了致しました。沙恵香様、カゲニエとなっていただけた事、誠に感謝いたします」
神主さんによる奉納祭の終了宣言を聞きながら、アタシの意識は闇に落ちていくのだった。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n2559hw/

陰肉奉納祭　当日編

2024年6月2日19時05分発行